

■大谷中学「花まつり講話」

真城義磨校長

2010年5月7日

おはようございます。今日は1カ月遅れの花まつりを行っております。花まつりというのは、一年生は宗教の時間でこれから勉強すると思えますけれども、お釈迦様という方がおられた。その方がお生まれになられたのが4月8日と言い伝えられております。4月には入学式や始業式など色々ありますので、本校では大体1カ月遅れの5月8日に行っていますが、明日5月8日が第2土曜日ということで、本日、5月7日に行っているところです。本校だけでなく、あちこちの仏教系の学校で本日花まつりがお祝いされているわけですね。それで、なぜお釈迦様の誕生をお祝いするのに「花まつり」というのか、あるいは花まつりという行事をするのかということからお話したいと思います。

2年生、3年生はすでに良く知っている話ですが、今から二千数百年前、現在の国で言えばインドとネパールの国境辺りに釈迦族という人たちが住んでいた。「お釈迦様」と言われますが、お釈迦様の釈迦というのは、その辺りに住んでいた種族の名前です。その釈迦族の子供として生まれるわけですが、お父さんは王様です。ですから王様の家のお生まれですね。お母さんは、近くの国からお嫁に来られた。それで、最近では日本では少なくなりましたが、かつては日本だけでなく多くの国では、お母さんが初めて子供を出産する時は、自分の故郷へ里帰りをして、リラックスして、安心して第一子の出産に臨むという習慣があった。それで、そのお母さん、マーヤという方ですが、自分の生まれ故郷の方へ帰ろうということで、色々とお側仕えの人たちと移動をしていたんですね。その途中にルンビニというところがあるんですが、そこは場所一面が花畑、花園です。公園になっているのですが、そこで少し休憩をしましょうということになりました。そこで、産気づかれて出産が始まって生まれるということになったわけです。ですから、釈尊、お釈迦様は屋外出産、花畑の中でお生まれになられた。そういうことで、お釈迦様のお誕生をお祝いする時には、こうして花をたくさん飾って、お誕生をおめでと、生まれてくれてありがとうというお誕生のお祝いをするわけですね。

京都に花園中学校とか、花園高校とか花園大学という学校がありますが、その「花園」もお釈迦様がお生まれになられた地名、場所から来ているわけです。諸君の中には、幼稚園や保育園でルンビニ幼稚園、ルンビニ保育園というところに通われていた方もいるかもしれませんが、そのルンビニもお釈迦様がお生まれになった場所の地名から来ているんです。あるいはアショカ幼稚園、アショカ保育園というのもありますが、それもマーヤというお母さんがお生まれになる、出産が始まるきっかけになった時にアショーカという木がルンビニの花園の中にあつた。その小枝に手を伸ばそうとして、その時に出産が始まったという言い伝えがあつて、お釈迦様の誕生のシンボルの木としてアショーカ、日本では無憂樹と言いますが、そういう木が大切にされるわけです。

また勉強していきますが、お釈迦様の人生、一生涯を考えた時に大切な木が三つあります。一つはお生まれになられた時のアショーカの木、それから35歳で覺りを開かれた時の菩提樹、本校の校章にもなっていますね。そして、80歳で人生を閉じていかれるその時に、やはり木の側で人生を終えられたわけですが、その木は娑羅の木、娑羅双樹と言いますが、

娑羅が 2 本セットになった、そういう木の間でお亡くなりになられた。菩提樹も、娑羅の木も図書館の横に植えてありますから、見てください。

そういうことでお花をいっぱい飾ってお祝いをするわけですが、そのお祝いのいろいろなやり方があります。今日も皆さんの前に小さい御堂のようなものが用意されています。花御堂と言いますが、そこに赤ちゃんの仏像があって、右手で天を指差し、左手で地を指差すという姿で、誕生仏といいます。それから、灌仏と言って、耳慣れない言葉ですが、何人かの代表の方がお釈迦様の頭からある液体をかけた。日本では甘茶と言いますが、インドではアマタとかアムリタと言います。甘露、甘い露とも訳します。それら一つひとつにお釈迦様が生まれた意義、どういう人がお生まれになられたかというのが、儀式の中にこっそりとメッセージが入っているわけです。いろんな言い伝え、物語、神話、それからおまつりや行事で行われる様々なことには、それぞれ実は意味があるのですね。そうしながら、このことを考えてほしい、感じてほしいということがあるわけです。

花を一杯飾ってお祝いをするということもそうです。今、皆の前にある花、あるいは献花としてお供えをしてくれた花、皆生きている、いのちのある花ですね。いのちある花は、当然寿命があって、しばらくすると枯れてしまいます。そのこともとても大事なことで、皆様のいのちもそうですが、いのちあるものは常に変化し続けている。今、皆さんは成長と言う変化を毎日、瞬間、瞬間にしている最中です。変化をし、そして最後の日がやはりやってくる、そういうことですね。

それから、花は同じ種類の花は同じように見えますが、よくよくちゃんと見てみると、全く同じ花というのは一つもない。幼稚園の時、保育園の時に『チューリップ』という歌を歌ったことがあるかと思いますが、「咲いた、咲いた、チューリップの花が。並んだ、並んだ、赤白黄色。どの花見ても、きれいだな」。赤白黄色、どの花見ても、綺麗。こっちが綺麗でこっちが醜いというのではないのです。どの花見てもという通り、先ほど言いましたように一つひとつが皆違って、違いながらも素晴らしく一生懸命咲いている、そういうことから、私たちは学ぶことがありますね。私たちはつい比べて、あんなふうだったらいいのに、自分だけどうしてこんなのだろうかと思いがちですが、そうではない。どの人の、どの人生もとても素晴らしい。そういうことですね。

それからもっと根本的に、二千何百年前の、しかもよその国の人のお誕生のお祝いを、日本の現代の 21 世紀の我々がなぜしなければならないのかということですね。皆さんもお誕生日にはお祝いをしてもらいますね。あるいは、皆さんがあの人のお誕生日のお祝いをしてあげたいと思うのは、どういう人なのか。お釈迦様という人は、世界中のあちこちの人がお誕生をお祝いしてあげたい、みんなでお祝いしたいという気持ちになる。それは、お釈迦様という人が人間として生まれた。ここにいる全員がお釈迦様と同じ値打ちで、同じ素晴らしさで生まれてきた。お釈迦様だけが素晴らしいんじゃない。生まれるということ言えば、君たちの中に一人として生まれなくてもよかったのに、生まれる必要がないのに、生まれたって意味がないのに、そういうふうにして生まれた人は、一人としていな

い。お釈迦様と同じように、どの人も皆、意味があって、価値があって、目的があって生まれてきている。そのことをお釈迦様のお誕生をお祝いしながら、共に確かめていこうということですね。

皆さんもそれぞれ、家族からお誕生おめでとう、生まれてくれてありがとうとお祝いしてもらったと思います。今、皆さんは実感がないかもしれませんが、これからの人生のどこかの場面で、自分はここの家族に生まれて良かった、お父さん、お母さんの間に生まれてきてよかった、あるいは生まれてから今日までの間にあの人に出会うことができた。あんな人に教えてもらうことができた。そういういろんなことがあった時に、先ほどの生まれてきてくれてありがとうの逆ですね。産んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう、出会ってくれてありがとう、そういうことがあるのだと思うんですね。そういうことを互いに確かめあう、そういう大事なこととして、この花まつりがあるわけです。

先ほどの灌仏の時に頭からかけていた液体、これにどんな意味があるかということ、お釈迦様がお生まれになられた時に、インドの龍の神様、龍神がお釈迦様の誕生をたたえて、素晴らしい事が起こったということで、先ほど言ったアムリタというものを降らせたという伝説があるのですね。アムリタの「ムリ」というのは死ぬということです。人間のいのちがなくなる、消えてしまうことをムリ、それに「ア」がつくと意味が反対になります。ですから、「ムリ」というのは人間が生き生きと生きようとするのを妨げること、あるいは「マ」と言います。悪魔の魔というのは、それが中国に伝わって、漢字でそれを当てはめて、それが日本にも伝わって悪魔の魔になっているわけですが、人間が仲良く生き生きと生きていこうということを邪魔するものという意味があります。これに「ア」がつくと意味が反対になります。生き生きと生きるのを妨げるということの反対ですから、元に戻って、私たちいのちあるものがすべて、それぞれに、共々に生き生きと生きていく。私が私として、私を殺さずに、そして周りの誰をも傷つけず、殺さずに、共に生きていきたいというのが元々私たちが預かっているいのちの願いだと思います。その願いをもって、ちゃんと生きていくことの象徴、それをアムリタというのですね。そういうものをお釈迦様の頭の上から注ぐことで、あらゆるいのちあるものが生き生きとなるような、そういうことを教えてくれる人が生まれた、そういう意味を伝説は伝えているのですね。ですから、日本では甘茶、これは漢方薬で用意してもらっていると思いますから、今日どこかで飲んでもらうといいと思いますが、健康にとってもいい漢方薬のお茶です。お茶屋さんによつたら、甘茶のティーバッグを売っていたりしますが、そういうものです。あらゆるいのちが、生まれたものが皆、生き生きと生きていける、そういうこと一番中心になる物の考え方、物の見方とかを教えてくれる人がお生まれになった、そういうことを表しているんですね。

こんな伝説もあります。インドのニューデリーには国立インド博物館があって、そこには石でできたあるレリーフがあります。どういうものかということ、女の人が三人、こうして手を出して、ここに柔らかい布のようなものを支えている。三人の女性が持っている布には、足跡が7つついている。そんなレリーフがありますが、このお釈迦様という人は、

生まれてすぐに7歩歩かれたという言い伝えがあります。皆さんはそんな馬鹿な、生まれてすぐの子がどうして歩いたりするのかと思われると思います。それは、当然です。科学的な理屈のことを言っているではありません。先ほども言いましたように、7歩歩いたという言い伝えを伝えることによって、そこにメッセージが隠されている。7歩歩いたという事で、このことを分かってくださいというメッセージがある。

後でパンフレットを見てほしいのですが、私たちが生きている人生はグルグルと迷った状態で、6種類の迷った状態をグルグル回っているということなんですね。一番ひどい状態は「地獄道」と言います。地獄道というのは、誰も自分がここにいるということを感じてくれない、認めてくれない。一緒に生きていきたいと思うけれども、無視されたり、いじめられたり、のけものにされたりする。あるいは、安心できる、ホッとできる、いい格好をする必要のない、ありのままの自分が安心できるような帰り場所、そういうところがなくなった時にそういうことを地獄と言います。

餓鬼というのは聞いたことがあるかと思いますが、欲望の奴隷になっている状態ですね。あれがほしい、逆もあります。あれもいや、これもいや。人間が自分の欲というものをコントロールできなくなってしまう。そういうのを「餓鬼道」と言います。「畜生道」というのは、家畜とか動物のことですが、家畜だったら飼い主に餌をもらわないと生きていけない。誰かを頼って他に依存してしか生きていけない。あるいは動物に芸を教える時には、餌で釣るか、鞭を使うかどうかかわかりませんが、怖がらせて、脅かせてする。脅すか、餌で釣るかしないと動こうとしない状態、無気力と言いますかね。それが三番目。

四番目は、腹立ち、怒り、憎しみの状態。五番目は、まだ起こっていないことを早め早めに心配をして苦しんでしまう。今、ここにいる人は全員生きているわけです。生きているんだけど、死んだらどうなんだろうとか色々と心配してしまう状態。そして六番目は、一見、恵まれた状態に見える。衣食住に困らずに便利で快適で、そこそこ健康で、そこそこ長生きで、こんなふうになったらいいなという状態。そういうのを「天道」と言いますが、そこまでは六種の迷いの状態なんだ、そこまでは人間が目指すべきいい状態ではなくて、そこから出なければいけない。

7歩歩かれた、その7というのは、今言いました6つの迷いの世界を一步越えられたという意味ですね。そうすると、そのことを教えてもらうことによって私たちがあんなったらいいな、金持ちにさえなれば幸せになれるんだと思っている。それが違うよ、そのものの考え方は迷っているんだよ、迷いの中なんだよ、そこに本物の幸せなんてないよと。先ほども言いましたようにお釈迦様という人は、王様の家に生まれた。ですから、考えられるあらゆる贅沢ができた。しかし、ある時そのすべてを捨てて、本当に何も身につけずに、王子様ですからいっぱい宝石や金銀をつけていたんですが、それを皆自分の生活の世話をしてくれたチャンナという人にプレゼントして、自分は裸で森の中へ入っていく、そういうことで出家をされたわけです。

私たちは、お釈迦様が捨ててしまったものを一生懸命に求めている。そんなことを、ま

だいっぱい他にもありますが、お釈迦様の言い伝え、伝説が私たちに教えてくれることがたくさんありますので、そういうことを学んで欲しいなと思うわけです。

最初の方で少し言った、生まれてくれてありがとう、あるいは生んでくれてありがとうということですが、実は5月4日によく知っている方が亡くなられて、昨日お葬式がありました。その方は瀬戸内海の小さな島で、私の故郷なのですが、四十数年間農協に勤めていた。十歳台から六十歳の定年になるまでずっと勤めてこられて、高校を卒業されていたかどうかは分かりません。ひょっとしたら中学を卒業してすぐに就職されたかもしれませんが、四十数年間農協の仕事をされた。その農協の中でもそんなに出世して上の方へ行ったり、支所長になったということではなくて、最後まで農協の一職員として仕事をされました。島ですから都市ガスがなくてボンベのプロパンガスを使っているの、農協に電話がかかってきて、そろそろガスがなくなってきたのでボンベを交換してもらえませんかと言ったら、ボンベは重たいんですが、それをトラックに積んで運んで行って、交換しましょうということをしたり、いろんな農業器具を販売したり、農薬や肥料を販売されながらほぼ一生を過ごされた方です。その方がまだ六十代の後半なのですが、病気で亡くなられた。そのお葬式が昨日あって、私はお坊さんですからお経を読んでいたのですが、たくさんの方がお通夜にもお葬式にも来られて、それぞれにお焼香された。その姿をずっと見ながら、あるいはお通夜には家の中に入りきらなくて外一杯にミカン箱を逆さにしたのを並べて座っている人がいましたが、その姿を見ていて、この方々は、このお葬式で、亡くなられた方に何を言いたくて、伝えたくて、あるいは自分の中の何を確かめたくて、お葬式に来られたのだろうかと思いながら、お葬式に参列していました。

ずっと見ていると、ほとんどの方は大体、言葉で言えばひと言にまとまってしまうなと思いましたね。それは何かと言うと、皆、亡くなられた方に色々とお世話になった。農協の職員だからお金を払ったからそれでおしまいというわけではない。夜遅くでも、ガスがなくなったら困るだろうと倉庫をあけてもってくれるということですから、村中の人から愛されている。そして、亡くなっていかれた。雰囲気は、来られた方々、皆、「ありがとう」という言葉は口に出して言わないけれども、心で思いながらお焼香をされていると感じました。あなたがいてくださって、本当にありがたかった。感謝しています。そんな感じがお葬式の雰囲気の中にありました。もし、その亡くなった方が参列してくれた人たちに何か言うことができたなら何と仰りたいだろうなと思いました。それも、おそらく、「ありがとう」ということなんではないかなと思いますね。四十数年間仕事をするのができた。二人の子供を育て上げることができた。夫婦二人が何十年も寄りそうことができた。そして、村の中でたくさんの人たちと和やかに話をし、笑顔を交わしながら仕事ができる。そして人生を全うした、こういうことを仰りたいんじゃないかなと思いますね。

もっと言えば、多少「ごめんなさいね」ということもお互いにあったかもしれないと思いますね。だけど、あなたに会えて本当に良かった、嬉しい。そんなことが人生の最後に確かめ合える、それがお葬式の大事な意味ではないかなと、お葬式に参加して感じたこ

とです。

皆さんもそれぞれいろんなものに支えてもらって、いろんな人に助けてもらって包んでもらって、応援してもらって、心配してもらってしながら生きている。そのことを確かめてほしい。こうして、「お釈迦様お誕生日おめでとう」と同時に今ここにいる皆のそれぞれにお互いに、「お誕生おめでとう、生まれてくれてありがとう、僕と私と出会ってくれてありがとう、一緒に生きてくれてありがとう」、そういうことを言い合うような関係であってほしいし、そういうことを確かめるということで、この花まつりという行事を大事にして欲しいなと願いながら、花まつりの言葉とします。以上です。

(30分)